父とお馬と

ゆでたまご

父とお馬とゆでたまご

『有馬記念週だ！』
　前に座る男性が広げたスポーツ新聞の一面で、真っ赤な特大の活字が踊っていた。十二月も半ばを過ぎたある日、昼前の空いた電車に乗った時のことだ。
（あー、有馬記念か、年末だもんね。あれ？私、競馬になんて全く興味もないのにどうして知ってるんだろう？）
　しばらくクエスチョンマークが頭の中で点滅していたが、すぐに思い当たることに行きついた。
父だ。

　二十年前八十歳で逝った父は、若い頃から多趣味な人で、際立ったものはなかったが、それなりの腕前であれこれと楽しそうだった。ただ、ギャンブルが好きなのには、母がいつも怒っていた。
　会社が休みの日などに、
「お父ちゃんどこやろ？探してきて」
　母がそう言うと、兄に手を引かれた私は、すぐさま駅前のパチンコ屋さんへ駆けて行った。三軒あったどの店も、耳をつんざくような軍艦マーチとチンジャラジャラの音が鳴り響いていた。そしてそのどこかに父は必ずいたのだ。
　小学校に通い始めた兄が、「明日遠足や」とうれしそうに帰ってきたときのことだ。
「よし、お父ちゃんがおやつ買うて来たろ」
　父はそう言って出かけ、意気揚々と両手いっぱいのお菓子を持って帰って来た。高そうな普段見慣れないお菓子を見て、兄も私も手をたたいて喜んだが、母だけはぷりぷり横を向いていた。
「子供の遠足にパチンコの景品持たすやなんて、ほんま情けない」

　その中でも、父がとりわけ好きだったのが競馬だ。
　そんな父と私は、一緒によく競馬場へ行ったのだ。長い間ずっと、まだ小学生になるかならない女の子をどうしてあんなところへ行かせたのだろうと不思議でたまらなかったが、大人になって母の魂胆だったことに気付いた。父は、負ければションボリ帰って来るが、ちょっと当てると喜色満面、巨万の富を得たように錯覚して、きれいなお姉さんのいるところへ行ってすべて使い果たしてしまうのだ。流石に幼い子を連れていてはそれはできないと母は考えたのだ。

　昭和三十年になる前だろうか、私の記憶もグレーの靄がかかっているが、いろんな競馬場へ行ったことは確かだ。今でも競馬場の名前だけはスラスラ出てくるのがちょっとかなしい。
　どこの競馬場へ行くのにもかなり遠くて、電車に乗って、また乗り換える。その競馬場に向かう車内は一種異様なものだった。どのおじさんも馬の写真と数字が並んだ薄い新聞を食い入るように見つめていて、赤青で一本になった色鉛筆で必死で何かを書き込んでいる。使わない鉛筆は、耳に挟むのが決まりごとのようにみえた。
　そんなおじさんたちに埋もれるようにしてやっと駅に着くと、私は、ほっと深く息をする。おじさんたちは、背中を丸めて、みんな同じ方向にぞろぞろせかせか歩いていく。話し声もなく、土埃の道を踏む音だけが聞こえていた。歩いていくと、入口の前で、リンゴ箱を逆さにして立っている何人かのおじさんの大声がひびいていた。
「お父ちゃん、あのおじさん何してるん？」
「あのおじさんは予想屋さんで一等賞になるお馬を教えてくれるんや」
「うわっ、すごー、お父ちゃんも教えてもらうん？」
「いいや、お父ちゃんは毎日しっかり自分で勉強してきたからな、いらんのや」

　そんなことを話しながら殺風景な薄暗い食堂に着く。父は、決まったようにゆで玉子を買って私に持たせると、どこかへ行ってしまう。
「ここで待っとりよ、どこへも行ったらあかんのやで」
　私は、背もたれもない丸椅子にぽつんと座る。薄汚れたおじさんたちがそそくさと食事する片隅で、新聞紙に包まれた玉子の殻をゆっくりとむく。食堂の中は、煙草とお酒とトイレのにおいがこもっていた。そして、テーブルも床もべとついていて気持ち悪かった。あの時、何故ゆで玉子だったのだろうと、今も考える。父は玉子はごちそうだと信じていた。確かに高価だったし、子供には玉子が一番だと単純に思い込んでいたのだろう。うどんやカレーとかもあったはずだが、やけどなどの心配から注文しなかったのだろうか。
（お母ちゃんがお花の形に切ってくれたんは、おいしいけど）
　そう思いながら、なかなか喉を通らないゆで玉子をいつまでもモソモソ食べていた。

　「さあバドックへ行って元気なお馬さん見よう」
　やっと戻ってきた父は、そう言うと外へ出た。柵の中でたくさんの馬がゆっくりと軽やかに走っている。空を見上げて気持ちの良い空気を思いっきり吸うと、遊園地に来たような気分になる。
「ほら、馬はな、頭をぶんぶんふっているのが勢いがええんやで。あっ、このお馬さん、調子ええなあ」
　そんなことを言いながら新聞に何やら書き込んでいる父の傍で、目の前を進む騎手を私はうっとり眺めていた。
（白雪姫を迎えに来た王子様や）
　少し前に母と観て、心に焼き付いたディズニー映画の色鮮やかで艶やかな服が、馬の背で風をはらんでゆれているのだ。

　いつまでも見ていたいのに、父が急がせる。
「これから馬券買うで。お父ちゃんは素人臭い単勝は買わんのや。複勝に勝負かける。この枠番がちょっと気になるんやなあ」
　などとぶつぶつ言いながら行った馬券売り場は何とも奇妙なところだった。手だけを入れる小さなトンネルのような穴がいくつもずらっと並んでいる。これと思う目当ての番号の穴にお金をつかんだ手を入れると、馬券を渡される仕組みだ。売っている人の姿は、頑丈な格子の向こうで見えない。私は、父が手から闇の向こうに引きずり込まれるのではないかと、ドキドキしながら片方の手を強く握っていた。行列のできている猥雑な場を通り過ぎて、広いレース場に向かう。
「ここに座っとり」
　そう言われて長い木の板に腰かける。はるか向こうは目の覚めるような緑が丸く広がっている。周りを見ても、馬券を握りしめたおじさんばかりだ。双眼鏡をのぞいてたり、新聞の上で寝ているおじさんもいる。
　突然、ダーンという音で一瞬静まりかえる。遠いところを馬が塊になって走る頃、ドーという雄叫びが上がる。
「行けー！そこや！」
「鞭当てろ！頼む！行けー！」
　おじさんたちは立ち上がり、私は何も見えなくなる。しばらくすると、悲鳴が上がり、怨嗟の声と共に紙吹雪が舞い降りてくる。はずれた馬券をちぎってほおり投げるのだ。私は、その薄い紙吹雪が宝塚の歌手になったみたいで大好きだった。
「おとうちゃん、当たったん？」
「今度や。父ちゃんは次のレースにかけてるんや。今日は重(おも)馬場やし、今度はいけるで」
　そんなことを何度か繰り返し、私はまた買ってもらったゆで玉子を食べながらずっと待っていた。

最後のレースが終わり、乗った夕暮れの電車は、疲れ果てたおじさんの顔ばかりが並んでいた。

月日は流れ、片時も煙草を離せなかった父は、肺がんで逝った。
もう出歩くのも無理になった頃でも、枕元にはいつも赤青鉛筆と一緒に、競馬欄を上にしたスポーツ新聞が置いてあり、テレビ中継も欠かさず見ていた。画面に映し出される競馬場は、おしゃれなレストランや遊園地もあって、幼い子を連れた家族が楽しそうに遊んでいた。
「また一度行ってみたいな」
父は、そう言いつつも体調を崩し叶わなかった。
「サラブレッドは人間が創り出した最高の芸術や」
口癖のように言い、ベッドの側に写真も飾っていたけれど、私は生半可な相槌しか打たなかった。犬でも金魚でも人間が手を加えすぎた生き物は、哀しいと思ってしまうのだ。そんなことよりも父に対する反発が大きかった。
陽気で、子煩悩で、製鉄所で技師として定年退職まで一途に働いた父だったが、早くに亡くなった母には決していい夫ではなかったと思う。私は『母の敵』のように父を嫌っていた時期もあり、老いた父にもつい冷たく接してしまうのだった。一人暮らしの父に、もう少しやさしくしてあげればよかったと、ずっと胸がチクチクしている。
実は、今も私はゆで玉子が苦手だ。なんだかあの競馬場のにおいが、ゆで玉子にかぶさってきてむせそうになるのだ。

乗った電車は終点に近づいて、前の男性もスポーツ紙を折りたたんだ。新聞の向こうから現れた顔の目元がちょっと父に似ていて、クスッと笑ってしまった。
「お父さん、もうすぐあなたの好きだった有馬記念だって。しっかり予想して当ててね」
そう一人つぶやいて電車を降りた。